

是湖」云々とある安是湖にあたる。この湖、普通ミヅウミと訓みたれど、ミナトとも訓むべきこと、遠江浜名郡猪鼻ノ湖神社の下に参考して之を知るべし。又、風土記標註、宮本氏

曰「安是は浅瀬の義、今の銚子といふ所、渚汀遠く浅ければ、安是といへるなるべし」云々。  
(註七) 茨城県新治郡出島村字安筋

## 〈シンポジウム〉

# 古代文学史

われわれは去る八月の夏期セミナーにおいて「古代文学史」をテーマにシンポジウムを行なった。その担当は

五世紀まで 講師 賀古 明 討論司会 尾崎 暢映  
六・七世紀 講師 大久間喜一郎 討論司会 渡瀬 昌昭  
八・九世紀および総まとめ 討論司会 加藤 静雄  
であった。八九世紀については講師の急な欠席の為、このような形になったものである。以下はその要約である。なお文体の不統一は諒とされたい。(編集部)

## 五世紀まで

(講師 賀古 明)

### はじめに

五世紀までの文学について述べるのが担当である。しかし、五世紀までには、現存の日本文学資料は全くない。ただ、文字使用の記録資料としては、五世紀の初め、履中天皇四年の条に、「始めて諸国に国史を置き、言事を記し、四方の志を達さしめき」という文献記録がある。この他に、現存の資料として、反正天皇代とされる船山古墳出土の大刀の銘における漢字の音・訓の混用表記文、ま

た、五世紀のものとされる隅田八幡神社蔵の鏡の銘文がある程度である。しかし、これらは、すべて、帰化人によるものと考えられている。ただし、このように文字の使用の資料が見出されることは、それから、それによる日本人の文字使用が考えられ、文学が生み出されて来る可能性を十分に推考せしめるものがある。

このような状況の下流の中から、帝紀・先代旧辞などが生み出されて来るまでの時代性を、本論においては、考究の対象とし、日本文学の生誕を考えてみることにするであろう。

ただ、文学は、文字以前からあるとする考え方からすれば、文学の生誕は、一層古く遡って考えなければならぬ。そして、それは、人間があれば、そこに文学があるとする点までも遡上すること

になろう。

これは際限のない問題となってしまう。文学と称し得るものは、まず、同域内の人々によって同感され、大切にされ、更に、それが異域の人々にも、また、後代の人々にも享けとられ、伝えられることを期待し得るものとして形成されるようになった時を、その生誕の時代と考えるべきものであろう。しかも、それは、更に、多くの人々にとって、望み豊かな将来を約束する時代環境を、その生誕のための必要条件とする。

この意義において、文学の生育は、古代においては特に、国家権力の形成から充実への行路を、もっとも肥沃な土壌として促進され得て来ている。

日本の文学の生育の考察も、古代日本国家の発端から充実への状況の把握とその認識に始められるべきものであろう。

ここに、まず採りあげ、考えてみなければならぬ問題は、魏志倭人伝に記録された邪馬台国の問題及び宋書倭国伝に記録されている倭国五王の問題とである。この二つの問題は、既に、長い年月にわたって、史学者によって論争がなされて来ている。しかも、今日なお、結論に到達していない。われわれ古代文学研究者は、この諸論を享けながら、その中から、われわれの立場において問題の解明を追求し、日本文学の曙を見究めなければならぬであろう。

### 邪馬台国の所在—九州説

邪馬台国の所在に関して、これは、九州説と畿内説との二つに大きく分かれている。しかも、それは、その邪馬台国が、倭国五王すなわち五世紀の畿内王朝といかにかかわるものであるかという点に

分岐点がある。

ただ、筆者は、以前から、邪馬台国と倭国五王とは、所謂王朝としての血統的つながりは全くないのではないかと考えて来ている。また、この立場からも考え、見なおしてみるべきであろうと思っている。したがって、本論は、その方向への考究に傾斜することが多くなるであろう。

しかし、ともかく、まず、倭人伝の記録の中で、二世紀の中葉に倭国に大乱が起り、卑弥呼を擁立することによって一応連合政体としての統一・安定を得たこと、及び、その後、三世紀中葉の卑弥呼の死後に起った内乱が、宗女壹与を次代の王とすることによって再び安定を得たことを記している記録事実は、すべて、九州内でのこととみるのが至当であろう。これは、当然、九州説の出発点である。

しかし、なお、このための前提として重要な問題は、倭人伝の前半部に記されている国々の方向・距離の解釈の問題である。これは、邪馬台国論争のキーポイントである。

倭人伝に記されている国名の中、第二番目に記されている対馬国から一支国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国までの六ヶ国の所在を北九州内とすることは、さほど異論のない点であろう。問題は、第八番目の投馬国及び次の邪馬台国への方向・距離の把握にある。これに関してもっとも多くの論争がなされて来ている。しかし、その中で、榎一雄氏によって示された新解釈は、精密で注目すべき説であると共に、これはまた、九州説の重要な支柱となる見解である。

榎氏説のポイントは、倭人伝の記録中に、「至」と「到」とが使

いわけられていることに注目されたことよって。すなわち、「到」の字は目的地にいたり着いたことを示すのであり、「至」の字は、そこにもいたり得る距離を示したのであるとするのである。この見解は、更に、牧健二氏によって、説文解字の段玉裁注に「到は至の地を得たるもの」とあることを提示され、一層確かな考究とされている。

ここに、榎氏の見解によれば、「到」が用いられているのは、第一番目の「狗邪韓国」と第五番目の「伊都国」のみであり、更に「狗邪韓国」は朝鮮内の国である故に今除外するとして、「伊都国」以外の国はすべて「至」が用いられている国であり、その国へ行く方向と距離とその国に関する伝聞を記しているというのである。この中、対馬国・一支国・末慮国については、「狗邪韓国」からのことを記しているとみ得、その文章の構成が三者類型であることもそれを証するものであろう。これに準じて、奴国以後、不弥国・投馬国・邪馬台国の四ヶ国については、すべて伊都国からの方向・距離を記しているのであり、この場合、実際にそれぞれの国へ、記載順に進んで行ったことを記録しているものとは認められないこととなる。なお、伊都国以後の国々についての文章は、伊都国の場合は方向・距離・国名・官名・戸数の順で記されており、奴国・不弥国・投馬国・邪馬台国については、方向・国名・距離・官名・戸数の順で記されていて、殆ど類型の構成である。ただ、類型構成といっても、末慮国以前の類型と、伊都国以後の類型は別個のものであることは注意しなければならない。なお、更に、榎氏はこの文章構成の中、方向と距離と国名との順について、伊都国の場合は、方向・距離・国名の順で記されているのに、奴国以後はすべて、方向・国名を記

し、これに距離を書き加えた形になっている相違点に注意されて、この相違が、「至」「到」の使いわけと一致することを前記の説の根拠の一つとされている。すなわち、奴国から邪馬台国までの四ヶ国の記録は、伊都国を根拠としてそれぞれに放射(線)式の関係において記録してあるものであると説かれたのである。

かくて、榎氏の説により、投馬国は勿論、邪馬台国も、九州内の国として、その所在を考えるべきものとなる。

ただ、邪馬台国のみに関しては「南……水行十日陸行一月」が問題として残る。しかし、榎氏は、これを「水行」すれば十日かかり、「陸行」すれば一ヶ月かかることを記したのであると解すべきものとされている。これで邪馬台国も、全く九州内の国と考え得ることとなる。

この榎氏の説を享け入れて、倭人伝の初めの部分に記されている国々と方向・距離の関係を虚心に読めば、倭人伝に記録されている限りでの邪馬台国が、九州内にあったものであることは疑問の余地もないことであると思う。

しかるに、今日なお、邪馬台国畿内説が強調されている。これは、宋書倭国伝の倭国五王の記録が、日本の四・五世紀の王期―応神天皇もしくは仁徳天皇から雄略天皇までの王朝代にかかわる、中国側からの記録であることが確認され得るものであることを、考慮の拠点として、倭人伝の邪馬台国にかかわる記録を、大和王朝の古い祖先代の記録と考えようとする思想―万世一系的な考え方―にその根拠が多少なりともあると考えられる。すなわち、邪馬台国は血統上畿内王朝につながっているものと考えようとする畿内説がなされるのであろう。

## 邪馬台国畿内説

畿内説では、倭人伝の「水行十日陸行一月」についての、榎氏説がまず第一に否定される。次に、中国の記録書類において、古く、「南」と「東」とが誤記されている例があり、また、方向記録は、誤認による例もあり得るとして、倭人伝の「南」を「東」の誤りとする。かくして、伊都国から「東南」「百里」の奴国に至り、そこから「東行」「百里」の不弥国に至り、更に「水行二十日」して投馬国に至る。そこから「水行十日」更に「陸行一月」進んで「邪馬台国」―「女王の都」に到着する。すなわち、北九州にある「遠つ朝廷」―伊都から、「女王の都」のある「ヤマトノ国」までの行路・行程などを、中国の使臣が、日本の出先官人からの伝聞によって記録したものが、倭人伝の記録であるとするのである。

したがって、倭人伝にある、二世紀末の「倭国」の大乱は、畿内でのことであり、その大乱後、卑弥呼の擁立によって成立した連合政権は、卑弥呼の死後も、更に三世紀後半において勢力が伸展し、遂には、畿内の大和を中心とするに至った。その邪馬台国すなわち畿内の大和王朝の勢力がもっとも拡大した時は、東方は伊勢潟、北方は琵琶湖を境とし、西方は、吉備、また讃岐あたりまで、瀬戸内海を含めて勢力範囲としたものであり、更に、その王朝勢力は、遠く北九州の伊都に監督官を置き、対島・壱岐・末盧・奴・不弥・投馬の六ヶ国をも統率するに至っていたという。この時期を大略四世紀中葉から末期頃までのことと考えることによって、日本資料に見られる倭軍の南朝鮮への侵略の史実に相当し、更に、五世紀の所謂倭国五王代―仁徳王朝につながるものとして考説されている。

しかし、この場合、中国資料中、「倭国」に関する記録のある資料は、三世紀中葉から倭国五王代より以前のものが全くなく、日本資料においても、三世紀及び四世紀前半の史実資料は全く欠けている。この故に、前記の畿内説による王朝史は、かなり脆弱なものとなる。このような資料の空白の個所の存在は外国の騎馬民族による征服説がなされる場面でもあり得よう。なお、この騎馬民族征服説において、その初代は崇神天皇とされている。この点、畿内説においても、大和に移っての第一代を崇神天皇とする説が多いようである。しかし、崇神天皇、更に垂仁天皇の実在根拠もかなり脆弱であり、景行・成務・仲哀の三天皇も、(応神―)仁徳王朝の血統上の先王としての立証性は、またかなり稀薄である。

## 日本文学の曙―仁徳王朝の成立

この辺で、再び、九州説にもどり、邪馬台国について今少し推考をなし、次に、それとは全く別の王朝勢力と考えられる所謂仁徳王朝の成立について可能なかぎりの確かさのある事情を見出さなければ、九州説もまた脆弱なものとなってしまふであろう。

九州説として、三世紀中葉の、卑弥呼の死後、宗女耆与を王とした邪馬台国の、その後については、倭人伝にはもう何も記されていないが、その邪馬台国の勢力が、東漸して、吉備あたりまで一時伸びたのではないかと考えられる節がある。そう考えられる時期はせいぜい三世紀末か四世紀の初頭頃までである。ただ、これは、あるいは、邪馬台国ではなく、その邪馬台国にとって、九州内でもっとも大きな対抗勢力国であったと倭人伝に記されている狗奴国であったかも知れない。今はそのいずれというよりも、北九州にあった勢



力が少くとも三世紀の末頃までに、東方の吉備あたりまで勢力を伸し得た期間があったのではなからうかとも考えられるのである。その根拠は、二世紀あたりまでに、北九州を主点として盛行したと考えられる所謂銅劍銅鉾文化が吉備地方あたりまで伸びていたことが、発掘調査の結果として認められていることである。しかし、この問題は、後述する仁徳王朝勢力の西方への拡大伸展についての考察の時に、併せて考えることとする。

このような三世紀末頃までの、北九州方面の王権とはかかわりなく、四世紀初期頃から次第に、畿内王朝勢力に生長したと考えられる所謂仁徳王朝の生育事情を確認し得る根拠を考究しなければならぬ。

仁徳王朝の根拠地は、記紀の記録のままに難波と考えるべきであり、更に難波を中心とした摂津・河内を地盤として生育した大豪族勢力の強力な生長が、仁徳王朝を出現させたものであろう。四世紀代を成立前期とし、五世紀を成立更に上昇充実の期とした王朝勢力を生み出し得る立地条件を具有するのは、摂津・河内の水豊かな平野地を除いて、畿内では外に見出されない。

北九州に連合政権の王となり得た邪馬台国の勢力の根源は、弥生時代中期から後期への水稲文化とそれに伴う金属文化によるものである。このような水稲文化とそれに伴う金属文化は、それが人間集団の生活にもっとも密着したものであるだけに、それらの東漸のスピードは、古代といえどもかなり速いものであり、それは国家的権力の援助を越えて速く東へ到着している。

仁徳王朝の生育期と考えられる四世紀は、考古学上からは既に古墳時代前期である。それは既に鉄器使用がかなり高度に進み得てい

る時期である。この鉄器の使用を河内、摂津の水豊かな平野に加え、た立地条件は、大豪族が、古代王朝勢力を樹立する絶好のものであり、北九州に邪馬台国王権を生み出した立地条件とは較べものにならない、強大なものである。

仁徳の難波王朝は、このような立地条件の具った地盤の上に、九州邪馬台国勢力の流れなどとは全く無縁に、畿内勢力として急速に生育したのである。このことは記紀の記録の中からも十分に読み採られることである。

なお、これに加えて、当時の中国及び朝鮮における政治情勢の変動が、仁徳王朝の成立への、外側からの促進力となっていることは、また、きわめて重要な要因であろう。

中国大陸と一衣帯水の日本列島内の国家的勢力の消長は、殆ど、中国また朝鮮内での勢力の興亡・盛衰にかかわりあって来ている。九州邪馬台国の盛衰も、魏の興亡にかかわっていた。畿内仁徳王朝の、成立への上昇と成立・伸展とは、漢帝国の朝鮮支配の衰微と朝鮮内での高句麗・新羅・百済の攻防に多くのかわりがあった。しかし、そのような接触・交渉に起伏があり、損益があったとしても、このような先進国との接触・交渉を通して、先進国文化の、日本への移入はかなり激しく仁徳王朝の成立と生育とを促進したであろう。四世紀・五世紀の中国記録、また記紀の記録から、この情況は確かに読みとり得る。

この仁徳王朝成立以前の、大豪族勢力としての上昇勢力は、四世紀の中葉頃までには、畿内を主たる発見地とする所謂銅鉾文化圏の西限吉備あたりまでを直接の勢力圏とし、更に、三世紀末までには衰・亡のいずれかにあった邪馬台国を含め、小国乱立の形勢となっ

ていたであろう北九州をもその勢力の影響下に収めていたであろう。四世紀中葉の任那日本府の成立、更に、その後の畿内王朝の朝鮮への出兵などは、その成果のいかんは別としても、また、四世紀末から五世紀へかけての仁徳王朝の成立を証するものとなし得よう。

なお、このような仁徳王朝成立以前の大豪族勢力としての伸展が、景行天皇の北九州への征行―日本武尊の西征・仲哀天皇の北九州親征・神功皇后の南鮮征討行として構成され、仁徳王朝の祖先史として成形され、それらの端初に崇神・垂仁天皇を祖王として置くことによって整形されているのが、所謂崇神王朝である。この故にこそ、特に崇神天皇を「御肇国天皇」また「所知初国之御真木天皇」と記紀に記しているのである。

このような崇神王朝の、記紀における記録は、その実在の問題としてよりは、むしろ、仁徳王朝史での、祖王史として、仁徳王朝の成立の、尊厳化のための遡上構成史とみなし得るものである。

なお、直前に置かれている応神天皇は、中西進博士の教示によれば、中国王朝史においては、初代王の前に、その祖王としての王名が（その実在はなくても）置かれている場合があり、この形式を継受した構成として、置かれたのであろうといわれた。この見解は、この場合、そのままに受け入れ得るものであろう。まさに、応神天皇紀は、その記録の半ば以上が、朝鮮勢力との接触・交渉のことに占められている。すなわち、その構成が、仁徳王朝の成立までの、畿内大豪族勢力と朝鮮勢力とのかかわりあい素材としているのである。これは、応神天皇代のこととは限らないものをも含んでいるとみ得、応神天皇紀は、祖王応神の王名を置くための構成と見

得るものである。

このような、天皇史の、祖先史尊厳化のための遡上構成については、なお多くの問題もあるであろう。しかし、それは、別の機会に譲るとしても、今、日本王朝の初代とみる仁徳王朝の成立への過程において、当時の先進国中国の高度文化は、朝鮮と日本との頻繁な接触・交渉の路線を通して、四世紀から五世紀の古代日本に、古代日本文化を、急速に生み出させる素地を醸成したことは疑う余地もないことである。古代日本文化、その中に生まれ出て来る日本文学の芽生えを、仁徳王朝代に考えることは、上述の考察からして、必ずしも不当とはいえないであろう。

日本において、日本文化の黎明は、そして日本文学の芽生えは、日本列島内での、第一の古代王朝の成立を、もっとも強力な要件とするものであった、と考えるのである。

しかし、帝紀・旧辞の生誕のための機運は、継体朝を待たなければならなかった。これは既に六世紀の問題であり、論者の担当範囲を離れる。

（文責 賀古 明）

## 討 論

（司会 尾崎 暢殃）

○司会者によって発表のまとめがあり、次いで発表者（賀古）の補足説明があった後、質疑討論に入る。

大久間喜一郎 「四世紀中葉に耶馬台国が亡びた」というのは何か史実があるのか。

賀古 三世紀中葉に衰え、四世紀中葉には東から伸びて来た畿内王朝によって吸収されたと考えられる。それは三世紀中葉に（邪馬台国の支えであった）魏が亡び、四世紀に入って楽浪郡が高句麗に合併されている。そのような情況から、邪馬台国が衰退していたのであろうと思う。

大久間 邪馬台国畿内説の重要な根拠は、九州のヤマトと畿内のヤマトとが同韻であるという説（大野晋氏説）である。これによれば邪馬台国は九州から畿内に移って来たとする可能性がある。ちょうど古墳文化の交替があるので三世紀の中葉までに九州に多少あった古墳文化が畿内に移ったのではないか。

○この問題に関連して、渡瀬昌忠氏が、自身参加された尼崎の田能遺跡発掘の見聞から、その中に弥生時代中期の住居跡を墳墓にして後期のものが埋葬されている、その中から古墳時代の副葬品が出ている。それ故に、これに盛土をすれば古墳になる。同様な性質のもの荒川の戸田市の遺跡からも発見されていることを述べられ、

渡瀬 このように同地形から同様な弥生時代墳墓が発見され、関東にもあることは、弥生時代の考古学的な問題が、（文献上の）空白をもう少し埋めてくれるのではなからうか。だから（引越ということより）弥生時代から古墳時代へつながってゆくと考える。

大久間 そうすると九州と畿内とが同韻であるということは偶然であったのか。

渡瀬 九州説をとれば（そうなる）。

賀古 それともう一つ、弥生時代の水稲文化の東漸は、古代国家成立よりも早く東に動いたと考えられる。その東漸は早いぶん早い。

渡瀬 つまり国家権力に支配される古代国家の成立は、弥生文化の普及とは別個というのか。

賀古 全く別個ともいえない点もあるが、やはり一応別と考えた方がよく、後になるほど水稲文化の伝流は速くなっていると思う。

大久間 そうすると九州説はかなり有力ということになるのか。

○これに続いて「漢委奴国王」印の発見と畿内説との関連についての質疑があり、更に古代墳墓の甕棺・木棺などの出土について大久間氏・渡瀬氏・加藤氏の間に応答があって、次いで、

大久間 三世紀末頃に崇神王朝ができたというのは？

賀古 それは五王説につながるためでしょう。崇神天皇の崩年干支「戊寅」（記）を古くは一九八年又は二五八年として卑弥呼時代を推定した。これをその後（主として直木氏の説による）更に、一運さげて三一八年、また一運下し三七八年とも考え、崇神天皇の即位を三世紀末と考えられている。これを畿内王朝の成立期としている。これはまた、記・紀共に「初国知らしめす」天皇の意の称が記録されていることになっている。しかし、この称には（史実としては）疑問がある。とにかく、仁徳王朝の存在は、五王説と併せて確証がある。応神天皇は（中西氏の教示に拠って）その祖王として、実在とは別に置かれている。その応神から崇神——仲哀代のことを作られ、更に神武——開化代、その上に神代<sup>○</sup>の記が加えられている。

○次いで、大久間氏から和辻氏による引越説によって、その間の年数推定の説が述べられ、それについての質疑があり、

近藤信義 引越説は或る所に止りながら少しずつ進んで行くのか、あるいは文化が或る所で榮えてそれが周辺的に広がって行くのか。

大久間 北九州から東方に来たという考古学上の証拠があるのか。

渡瀬 古墳文化からは(証拠は)出ない。弥生時代からだ。

賀古 金属文化が西から入って来るのと、国家の形成とが、何時も関係がなければならぬのだろうか。国家的な勢力とは必ずしも関係はない、水稲文化の東漸の線で、金属器使用が弥生時代中期から後期あたりに出て来る。そういうものが畿内に定着して、それによる飛躍的な発展として畿内王朝ができたと考えられる。なお、朝鮮を通じて入って来た文化が、日本国内のどこを通過しているか、九州、山陽道以外に山陰道を考える必要もあろう。弥生時代の人間生活の必要性に添って流れて来る水稲耕作の伝播の後を追うようにして流れて来た。金属使用などは。

尾崎暢殃 そのように朝鮮との交渉を考える場合、歴史社会学者のように仲哀天皇代を否定し、神功皇后を否定することはできないと思う。歴史社会主義的な行き方はあまり理屈がうまく合はずいで信用できない。否定することが合理的と考えるのは行きすぎではないか、朝鮮との交渉が何らかの形であって、それが記憶され、その記憶が神功皇后の伝説というものになったのではないか。

賀古 神功皇后の否定というのは全面的否定ではなく、神功皇后という個性の否定であって、朝鮮問題は三世紀以前から大きくひっかかりがある。又、それを経過しなければ所謂日本文化らしいものが生れても来ない。所謂先進的なものも入って来ない。

大久間 日本書紀の紀元を信ずれば神功皇后は時代的にいつごろになるのか。

賀古 書紀は三世紀。

大久間 書紀では神功皇后を卑弥呼にあてはめて書いている。それがかえって合理化ではないか。

尾崎 その合理化しようとしたのには爪のあかほどの根拠があったのではないか。全くのゼロからはこじつけられない。

賀古 少くとも仁徳王朝の成立は金属文化によって盛りあがったものである。その勢力が今度は、西へ及び、更に伸びて朝鮮との交渉が出て来る。そのことを遼上記録として構成され、応神天皇代↓神功皇后代に朝鮮問題が出て来る。このようなあたりに騎馬民族征服説などが入り得るところがある。ともかくも、仁徳天皇代―五世紀前の南鮮出兵は大きな問題として認めねばならない。この出兵はむしろ向うからの要請によるものだとする史学者の説もある。それほどに当時は畿内王朝は既に充実して来ていたというのである。この畿内王朝の西方への進出について、銅鐸文化圏の広がりや問題として考えてみる必要があるのではないか。

○次いで銅鐸の出土状況・用途・意義についての質疑応答がしばらく続き、

賀古 ともかく邪馬台国とは関係なしに、畿内地方へも水稲文化の流れに添って鉄器も入り得るということを考えてみる必要がある。

尾崎 考古学者は縄文時代に水稲があるといっているが？

賀古 それは本当に水稲か。

渡瀬 それはわからないが、田能遺跡では、縄文土器が出る上に弥生土器が一貫して出て、重なっている。だから恐らく縄文文化の上にと弥生文化が継続しているのではないか。

賀古 それは当然そうだろうが、しかし、縄文時代末期に水稲が



あったのか。おかば（陸稻）を考えてみなければならぬのではないか。稲が出たといって直ちに水稲といえるのだろうか。陸稻と水稲とは耕作としてかなりの相違と、進歩の差とがあるはずである。

**渡瀬** 田能遺跡から出た木棺には高野マキの板が用いられている。これは鉄器を用いなければできない。だから相当広汎な交流が考えられる。

**賀古** それはいつ頃か。

**瀬渡** 弥生時代後期、三世紀頃。

**賀古** 弥生時代中期をすぎれば相当な鉄器が既に用いられている。なお、農耕的な鉄器の入り方と国家的鉄器文化としての取りあげ方を必ずしも一緒にはできない。民衆生活―農耕生活の中に流れ込んで来る方が優先するだろう。

○次いで、騎馬民族征服説についての質疑応答があり、  
**賀古** 騎馬民族征服による初代も崇神天皇代としている。その史的理由ははっきり示されていない。ただ「崇神ⅡミマイリヒコⅡミマ城入彦」で、任那の王であったと考えるのを理由としている。この説も、結局後の五王代につなげるためであったようだ。

**大久間** 九州説とすると、邪馬台国の使者と、畿内王朝の使者とを、中国の方で同系統のものとしていたのだろうか。

**賀古** ともかくそれは時代として重なっていない。しかし中国側の見方は、記録からはずれも「倭」国としているのみではっきりしない。ただし、中国側からすれば倭の国を利用するという政治上の関心からは、同系統であるか否かは問題でなかったのではないか。その時、役に立つ勢力であればよかったわけだ。

○再び、尾崎氏から神功皇后否定について意見があり、

**尾崎** 神功皇后は近江の息長氏の持っていた伝承があると考えている。はっきりした具体的な事実は指摘できないが、何らかの破片なり、印象なりが記録の上にとどめられている。それから考えついたのではないか。歴史社会学派の人々が非常に合理的に証明しようとしているのは行きすぎであり、そういうことを見落しているのではないかと思う。

**大久間** どこに原因があるか、どこに理由があるかを考える時、一応疑って、再出発することをしなければならないのではないか。

**賀古** 結局、神功皇后代を否定するので、その頃、あれが瀬戸内海に関連していることと朝鮮問題とは、時代性として当然出てくるのだ。その上で神功皇后―神功皇后代を構成しあげているのだ。

**大久間** その当時朝鮮経略問題は政治事実としてあった、それと神功皇后とが重ねあわされている。

**賀古** 要するに、神功皇后個人―神功皇后代は否定するが、そこにある歴史的なもの、自然的なものは決してオミットしていない。朝鮮との交渉は重大なものとして五世紀以前からある。それを神功皇后伝説として作りあげているのだ。その作り手が息長氏であったかも知れない。

**大久間** このような中から、文学があるとすれば、どこか。

**賀古** 統一的な国家成立ということを見きわめると、例えばそこに正反代の中の文字使用の資料などがある。このようなことから芽生えは考えられる。それを遡って考えると、五世紀王朝の中で、どのように帰化人から享けて文学らしいものが芽生えて来る素因が見出されよう。



大久間 どうせ、文学というものは、そのような必要な、例えば、碑の銘のような金石文はどうしても必要なものだから、そこで漢字を用いたり、後代に残そうとした。しかし、一般の文学といったものは、当時は、口誦文芸といった形をとっていた。

賀古 口誦文芸といわれるものを広く文学といい得れば、だ。しかし、こうなると、文学とは何かということから論じなければならぬ問題となる。

○次いで渡瀬氏から、神功皇后紀の「熊之凝の歌」について尾崎氏への質問応答があり、更に記紀歌謡と神話・伝説との関連についての問題に入り

尾崎 説明の文章と歌謡とが従来切り離す方向にむかっていた。すなわち作品の作られた境遇が全くこじつけとされているが、それは全く事実無根ということはないだろう。

賀古 記紀歌謡の大部分は習合とみられるものが多いが、そうとばかりはかぎらない。例えば、伝承の中から作られたものや、伝説中の詞句が韻文化されて歌謡となっているものなど、大きく分けて四種類ぐらいはある。

渡瀬 五世紀までの歌謡というものは？

賀古 五世紀までの歌謡の実在は、記紀の中のものでは、疑問である。歌謡の挿入はかなり後だと思う。天武十年前後のものが多いと思われる。

○次いで天照ひるめの命と太陽信仰とについて大久間・尾崎の両氏の間に応答があり、また出雲氏族についての質疑があり、

町方 和夫 九州邪馬台国と畿内大和とが統一されたのではないか。それは日本武尊の伝承からそう考えられる。なお、崇神王朝と

か、応神天皇とか、仁徳王朝の説話はどこからできたか。どういう契機で作られたのだろうか。

賀古 仁徳王朝から出発して、その前に遡ってゆくと、その節目の一つが崇神・垂仁天皇のところである。更に遡った節目が神武天皇、それから更に遡った古い祖先話として神代の記が作られている。古事記でいえば、まず下巻ができ、遡って中巻ができ、最後に上巻ができているといえる。文構成・文体から見ても、上・中・下の三巻が一貫して作成されたとは考えられない。なお下巻の仁徳天皇代以降も一巻一括の構成とは見られない。少くとも武烈天皇代までと継体天皇以後と、その間に節目がある。歌謡においても、古事記では顕宗天皇代で歌謡がなくなり、それ以後の歌謡は日本書紀の記録のもののみである。

大久間 架空の天皇とされているものは何時頃作られたのだろうか。

賀古 今日、ウル古事記の芽生えは継体朝に入ってからといわれている。武烈天皇代以前と継体天皇以後との記録をくらべて見ると、後者の方が記録らしくなっている。武烈天皇以前については、継体朝以後の人が、武烈天皇以前のメモ的資料だけを享けとって、その事実についてはよく知らないままで、それによって、都合よくまとめたと思われる節が多い。

近藤 結局、日本の古代文学史の出発点というのはどういうふうにか考えたらいいのか。

賀古 わたしは、継体朝からといいたい。

近藤 そうすると五世紀には、文学がないのか。

賀古 文学というものが生み出されて来る基盤としては、日本で

は、統一国家的なものができてくる必要があった。それが五世紀。その芽生えが、継体朝に開花するようになったといえるだろう。

近藤 要するに、文学を生み出す基盤というものが統一国家的気運というものと密着している。統一国家的基盤がなければ、文学というものは生み出されないというのか。

賀古 今日、わたしの結論としては、そのとおりだ。日本の文学の発足―芽生えを見究めるために、その時代性を論じたわけだ。それまでに、日本で、帰化人が書いたり、記録したりしたということがあって、それによって養成された芽生えといえる。その帰化人は初めから優秀な者が来ているのではなくても、当時の中国↓朝鮮の文化と日本文化というものには、大きな落差がある。それを当時の知識人が享けとった。その取りあげ方も国家的な形で取りあげねばならなかったであろうと考えられる。

大久間 文学としてわれわれがどこまで認めるかという点、やはり後世まで残る、残そうという意義があつてこそはじめて文学と認められると思う。その価値を認める人がいて、その認められた価値によって一定の組織の中で文学を伝えてゆくという試みを持った時に、それを文学だと認めていいと思う。

賀古 それでなければ、文学は論じられなくなる。

○司会の尾崎氏が、近藤氏の質問と、その答えで、略、結論が出たとされ、この討論を終る。

(文責 賀古 明)

## 六・七世紀の文学

(講師 大久間 喜一郎)

現存最古の文献である古事記が成立したのは、八世紀の七一二年ということになっている。しかし、この中に含まれている物語や歌謡がすべて、この成立時点まで口頭伝承の形態ではなかったことが、今日ではかなりはっきりしてきている。これは日本書紀の場合も勿論同様である。だが、記紀の資料となった文献が何時ごろから存在したかは明確には判らないが、恐らく天武朝を遡ることはなかったであろう。したがって、そこには、それ以前からの口頭伝承が何らかの表記法によって記されてあつたことも確かであろう。だから、極めて偏狭な考え方をするのでなければ、記・紀風土記以前の文学的空白の時代を埋めようとする企ては決して誤ってはいないと思われる。ただし、その企ては、記紀に記されている物語や歌謡に、記述されている通りの歴史的位付けを認めるということではない。そこには何らかの態度――文学と制作年代との正しい結びつきを識別する態度が必要となってくる。この識別は、研究者個人の恣意や視点如何だけでは解決しない問題である。そこで、今、伝承文学という範囲に注目して、一つの私見を述べてみたい。

制作年代 伝承文学というのは、作者も発生・年代も明瞭でない

の判定 民話・民謡のようなものばかりを指すのではないと考

える。文字表記が不可能であったり、不自由であったりしたために、